

## 別室指導について

### 不登校児童・生徒の状況

通常は3人、多い時で9人の生徒が別室指導を受けている。利用したことのある生徒は15名である。不登校の理由や状況は様々である。不安を抱えている生徒がほとんどであるため、安心して勉強できる居場所を求めて来室する生徒が多い。

### 具体的な取組

「得意なことを生かした個別指導」をねらいとして、校内別室指導支援員に美術科の個別指導を受け、登校意欲を維持することができた。それがきっかけとなり、部活動にも参加できるようになった。合唱コンクールで掲示する作品制作に他の部員と一緒に取り組み、自己肯定感を高めることができた。(3年女子)

小学校から不登校で引きこもり傾向であった生徒が、別室で英語の個別指導を受けてから登校できるようになった。それがきっかけとなり、英語以外の教科にも学ぶ関心・意欲が高まり、理科、社会の個別指導にも参加するようになった。現在は、卒業後の進路についても主体的に考えることができている。(3年男子)

授業で発表することに対し極度の不安感をもち、その授業がある日には朝から欠席してしまっていた。そこで、校内別室指導支援員の助言を得ながら、その授業にオンラインにより参加することで、欠席することがほとんどなくなり、登校日数が増加した。その結果、本人の不安要素はなくなり、自己肯定感が高まった。(3年女子)

不登校状態の生徒が、別室でオンライン授業に参加することで、次第に学校に慣れ、少しずつ教室の授業に参加できるようになった。授業でわからなかったことを積極的に校内別室指導支援員に質問するようになり、笑顔が見られるようになった。現在は徐々にできることを増やし、教室復帰することを前向きに目指している。(2年男子)



### 成果

- ・各教科を指導できる校内別室指導支援員をバランスよく配置し、一人ひとりの教育的ニーズに対応した別室指導を行った結果、登校できるようになった生徒が増加した。
- ・生徒の自己肯定感を育むことができた。

### 課題

- ・曜日によっては校内別室指導に参加する生徒が多いため、実施する教室の確保が困難であること。
- ・深い学びの実現に向けた指導をどのように実践していくか。

## 校内別室「リソースルーム」について

### 不登校児童・生徒の状況

対象生徒数は、令和 5 年 10 月末現在で 14 人である。そのうちの多くの生徒が、教室に行くことはできないが、校内別室「リソースルーム」（本校の別室の呼び名）では、各自が静かに学習に取り組んだり、本を読んだりすることができている。別室指導支援員やインターン生等とコミュニケーションをとることで、担任以外の大人とのつながりが増え、来室が続いている生徒もいる。

### 具体的な取組

1. 校内別室指導支援員やインターン生との情報共有  
本校の校内別室指導支援員は 5 人おり、1 日につき、2～3 人を配置している。また、インターン生も支援に入るなど、教員以外の大人の窓口をできるだけ多く設けることで、生徒は話しやすい人と会話を重ね、次の登校をつなぐことができている。活動日の後には、支援員や学生、登校支援コーディネーター、副校長が情報共有をしている。



### 2. リソースルームの環境づくり

本部屋は、元パソコン室であり、やや冷たい色（灰色の机や、黒い椅子）の部屋である。その雰囲気を変えるため、ぬいぐるみの配置や、絵画、写真カレンダー、英語のクイズ等の掲示をすることで、少しでも明るい雰囲気が感じられる環境づくりを行っている。



### 3. 校内別室指導支援員連絡票の活用

朝の時点で当該生徒の保護者から、リソースルームへの登校連絡が入った際には、担任はその日にやってほしいことや伝達事項を記入し、校内別室指導支援員に提出をしておく。生徒が登校できた際には、その日に取り組んだことや気が付いたこと等を校内別室指導支援員が記入し、後に学級担任との情報共有で活用している。連絡票は職員室内にファイリングし、関係教員がいつでも見ることができるようになっている。

### 4. 多様な別室指導の習得

本市には、学びの多様化学校である高尾山学園の他、教育支援センターが 2 箇所ある。実際に教員が見学を行い、個別や小集団における多様な支援方法を知ることができた。また、市教育委員会の指導主事等が本校のリソースルームに来ていただいた際には、多くの視察経験から指導・助言をいただき、よりよい別室指導をめざしている。

### 成果

校内別室指導支援員の配置により、学級担任以外の大人も不登校生徒に寄り添い、多面的・多角的な支援をすることができている。利用数が 7 月末 7 人→10 月末 14 人と増えていることから、不登校生徒が教室でなくてもリソースルームに居場所を見付け、登校できていることで、教員全体の意識も大きく変わっている。

### 課題

別室登校が続いてきた後のアプローチが、まだまだ模索中である。教室へのつなぎ方や、別室のままでも次へのステップをどのように行っていくのか、教員や校内別室指導支援員等と熟議を重ね、構築していきたい。

## 別室指導教室を生かした登校支援について

### 不登校児童・生徒の状況

当該児童は、昨年度まで欠席が目立つこともなく、今年度も1学期は順調に登校できていた。10月半ばに行った運動会直後から、「なんとなく学校に行きたくない。」という理由で休むようになり、別室を利用するようになった。親子共に、不登校に関してははっきりとした理由やきっかけは思い当たらない。

### 具体的な取組

#### ① 別室指導教室の開室

別室指導教室には、毎日午前9時から午後3時まで校内別室指導支援員が在室している。過ごし方については、学習をしたり、読書をしたり、絵を描いたり、工作をしたり、校内別室指導支援員と会話やゲームを楽しんだり、選択肢を多くしている。

別室で自由度をある程度広げ、利用しやすくすることで、登校や学校にすることが苦痛にならないよう配慮している。

#### ② 別室指導教室の環境づくり

校舎内を通らず、外から直接入室できる場所に別室指導教室を開室した。教室の中には学習スペース、他の児童や校内別室指導支援員との交流スペース、読書などができるリラックスペース、食事スペース、そして、パーソナルスペースも確保できるようレイアウトし、別室を利用する児童の、あらゆるニーズに対応できるように整備した。



#### ③ 校内別室指導支援員の情報交換会

毎週火曜日に、校内別室指導支援員全員が集まり、1週間の別室利用の状況、利用児童の様子や今後の支援の方向性などを情報交換する機会を設けている。現在、校内別室指導支援員がシフト制で在室しているため、同じ児童に対応する支援員が日によって交替する。その際に、児童に戸惑いや混乱が生じないよう、また、どの校内別室指導支援員が在室する日でも安心して登校できるように、情報を共有している。

#### ④ 校内別室指導支援員と関係教職員との情報共有

別室登校した児童について、連絡票（第2号様式）の他に、連絡シートおよびノートを作成し、管理職、担任、養護教諭、特別支援教育コーディネーター、特別支援教室専門員が回覧している。連絡シートには、毎時間の児童の様子や、「素敵だったところ、気になったところ」を校内別室指導支援員が記入し、「素敵だったところ」は児童にも伝えている。ノートは事務連絡が主であるが、なかなか一堂に会する時間が取れない中、大変有効な情報共有の手段になっている。

### 成果

運動会明けは1週間続けて欠席したが、翌週から別室を利用し、週に2日～3日は登校できている。最初は2～3時間程度登校し、別室のみで過ごしていたが、担任や支援員の働きかけで、徐々に専科、体育、総合的な学習などに参加できるようになった。友達の誘いで、給食も教室で食べるようになっている。欠席が連続しなくなった。

### 課題

今後、別室登校をする児童が増えると、教室の増室や支援員の増員など、さらに環境を整備する必要が出てくる。特に、不登校支援に関して知識や理解のある校内別室指導支援員を確保することが難しい。

## 校内別室指導支援員配置事業について

### 不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校入学後は通常どおり登校していたが、1年生の2学期頃から、周囲の友達の輪にうまくなじめず、不登校になった。2年生になってからは、一度も登校できていない。保護者は、無理に登校せず、笑って過ごせればよいと考えている。担任は、母と定期的に電話連絡を取っている。

### 具体的な取組

#### 組織力の向上、校内体制の強化

校内委員会の中で、週に1回情報共有を行っている。メンバーは、副校長、校内別室指導支援員配置事業担当、各学年1名ずつの教員、養護教諭、スクールカウンセラー、特別支援教育コーディネーター、特別支援教室専門員である。当該生徒の週ごとの様子について情報共有を図り、翌週以降の方策を決めている。

#### 実践の成果についての共有

校内別室指導支援員には、毎回記録を記入してもらい、別室にてどのような支援を行っているかが分かるようにした。また、この記録は、ファイルにまとめてあり、それぞれの学級担任や他の教職員も見られるようにして、情報共有を図っている。



#### 個々の不登校生徒への支援 1

当該生徒の母からの聞き取りを行い、母の目指しているゴールは「本人の行きたい場所に自分で行けるようになること。」という情報を得た。現状では外出、特に学校に行くことは非常に難しいので、支援員は、母に対し、支援員からの情報発信として、本人への手紙を送ることを提案し、了承された。

#### 個々の不登校生徒への支援 2

校内別室指導支援員は、母とのやり取りの中で、母に対し、当該生徒が趣味としている絵を通して、何かつながりがもてないか提案した。家以外の場において、当該生徒が必要とされている場の設定をすることで、当該生徒のもっている力を発揮することができないか、模索している。

### 成果

校内別室指導支援員が配置されてから3回、当該生徒の母とやり取りを行った。母を介して、当該生徒とつながりをもとめたり、校内別室指導支援員の人物像が分かる手紙を、母を介して当該生徒に渡したりして、当該生徒との人間関係づくりを行おうとしている。

### 課題

週1回の勤務ですぐに結果が表れない。また、当該生徒の変化が分かりにくい。相手の気持ちに沿って進めるためのスキルを高めることが課題である。

## 別室指導教室を生かした登校支援について

### 不登校児童・生徒の状況

主な対象は、高学年児童である。本校スクールカウンセラーと定期的に面談し、困難さについてのアセスメントや環境調整を組織的に図っている。現在、校内委員会での検討も経て、環境調整の一つとして、保健室の横に設けたスペース（別室）で児童のペースで学習活動等を行うことができるようにしている。

### 具体的な取組

#### 1 別室指導スペースの工夫

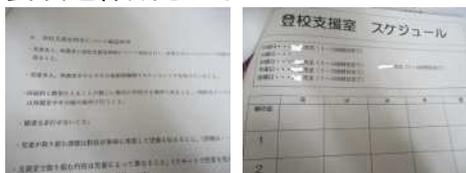
別室は2室ある。保健室内のスペースと旧物品室内のスペースである。保健室内スペースは児童が安心して活動できるように環境を整備し、担任に所在を確認した上で任意の時間に利用できるようにしている。

支援員の確保が十分でないため、主任養護教諭が対応することも多い。旧物品室内のスペースは、現在整備中で主に利用児童の荷物を置くスペースとしている。



#### 2 別室指導教室の運営要項の作成

別室指導教室の運営について、使用目的、利用上の確認事項（例えば利用に当たって保護者面談を行うなど）、スケジュールを共通理解できる要項を作成した。



#### 3 運営ルールの明確化

校内別室指導支援員が対象児童を担当するが、担任・学年・特別支援教育コーディネーター・スクールカウンセラーと連携して学校全体で支援することを運営要項に位置付けた。

#### 4 教室復帰に向けた対応

学級担任は、当該児童と一日一回以上会って会話し、信頼関係を深めるとともに、校内別室支援員と情報交換を行っている。また、週1回の生活指導上の対応委員会で状況を確認している。

### 成果

現在、定期的に3人、不定期に4人の児童が利用している。定期的に利用している児童は、ほぼ毎日登校できており、保護者面談やスクールカウンセラーによるアセスメントも円滑に行え、専門的相談機関への接続も進んだ。不定期に利用している4人は、教室での活動に困難を感じた時に利用できる場所ができたことで、不登校未然防止につながっている。

### 課題

別室指導支援員の確保が困難であり、コーディネーターの主任養護教諭が児童に対応することが多くなっている。児童の気持ちを理解して対応できる別室指導支援員を確保することが課題であるが、なかなか難しい状況である。